

富士の民話 あれこれ



▲現在の狸久保周辺。写真右上の丘にタヌキが登ってあたりを見回したと言われています。

犬の字の呪文

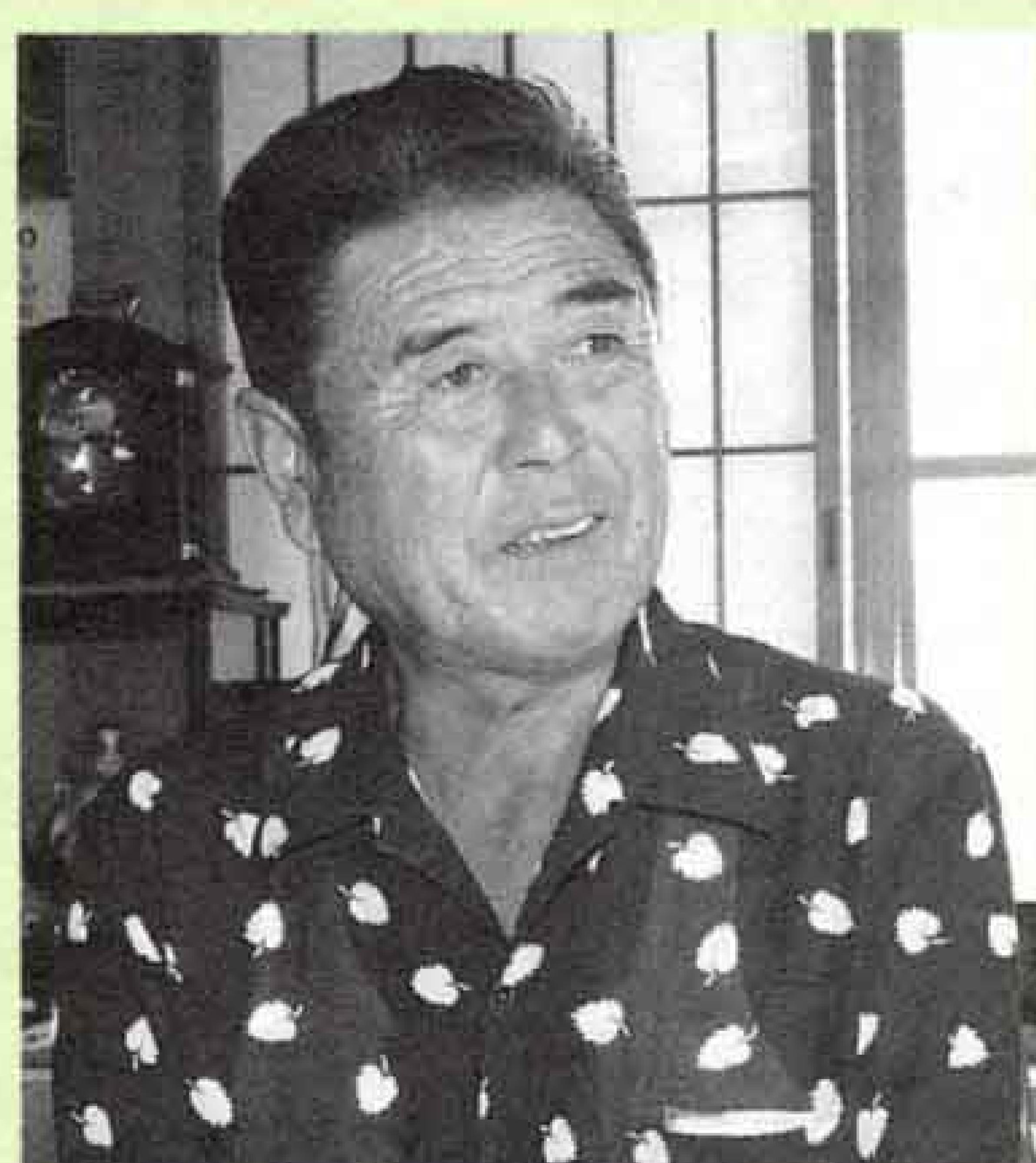
狸久保の

鷹岡の入山瀬に狸久保と呼ばれるところがありました。このあたりはタヌキが多く、通る人をよく化かしたと言わっています。

今回は狸久保に伝わる「犬の字の呪文」の話を紹介します。

昔、鷹岡の北部を通つて甲州へ塩や魚を運ぶ道がありました。ある秋の日の夕方、田子の浦の魚屋が甲州へ行つた帰り道、天間沢を行つて坂道に差しかかると、きれいな娘が道端の石に腰をかけて泣いていました。魚屋はその娘に、「一体どうして泣いているのか」と尋ねました。すると娘は、「私は甲州へ奉公に行つてきました。母が病気との知らせをもらい、ここまで来ましたが、先ほど目の前に人だまが見えました。きっと母が死んだのでしょうか。私は悲しくてもうこの先進めません」と話しました。

魚屋は、「それはかわいそうだ。私も同じ方向へ帰るから一緒に行こう。お母さんがまだ死んだと決まつたわけではないから」と励まし、一緒に歩き始めました。しばらくして、あたりもすっかり暗くなり、月も顔をのぞかせました。すると、生温かい風が魚屋のほおをさつとなでました。魚屋が後ろを振り返ると、娘の姿が見えません。不思議に思い前を見ると、そこには一本の大木が道をふさいでいます。魚屋は「さつきの娘やこれもタヌキのしわざに違いない」と思い、足元の石を拾つて、そこにタヌキの苦手な「犬」の字を書くやいなや、力いっぱいつの木に投げつけました。すると、大木は二つに裂けて倒れたので、魚屋はまたタヌキにだまされまいと一目散に逃げ帰りました。



地元の様子に詳しい
小林 義弘 さん
(久沢北)

昔の狸久保あたりは民家があまりありませんでした。木や草がうつそうと茂つていて、男の子でさえ一人で学校へ行くのも怖いくらいでしたよ。

お寺の和尚さんに化けたタヌキの話など、このあたりにはタヌキにまつわる言い伝えが多く残っています。タヌキが近くの小高い丘に登つて犬が近くにいなかどうか見回したという話もありますよ。小さいころよくおじいさんやおばあさんなどが話をしてくれたものです。

今では家も多くなり、昔に比べると周りの様子も大分変わってきたね。



こちら編集室

市のホームページが開設1周年を迎え、この間見ていただいた人は延べ4万5千人を超えるました。まだ見たことがないという方は、庁舎2階市民ホールで見ることができますので、ぜひごらんください。

この秋には市内中学校で、インターネットを使った授業を行うようになります。

家庭でも、インターネットは生活を生き生きと豊かにする道具としてテレビや電話と同じように定着していくことでしょう。

これからはホームページは、より親近感や人間らしさを出せたら、そんなふうに思ってつくっています。

人口 237,114人 (前月比+255)

男 118,116人 (+124)

女 118,998人 (+131)

世帯 77,625世帯 (+117) 9月1日現在

編集・発行 富士市総務部広報広聴課

静岡県富士市永田町1-100 ☎51-0123

